

焦 燥

焦

燥

橋

爪

五

健

私はよく知つてゐる
仕事に夢中なあの神にさそはれて
うつうつと寝入つた處を。
おゝ此の樹の匂はしい蔭
私はいつも茲に來ては俯仰し
好ましく思ひに耽りつゝ
何かしら肋あばらを撫で骨をさぐりたく……

あの甘い假睡の間に
自分に背せせて造られたといふ

一人の優しく妙なる存在を想ひ想ふと
あゝこの抜きとられた胸のあたりに觸りつゝ
揺られるやうな羞かしいもの戀しさの
抑へても壓へても衝きつのり

光る顎を限どる影のやうに

匂ひ深くも身をはなし

名も知らぬ姿も知らぬ

たゞ一人の幻をば抱きとり抱きしめ

その纖やかな肩を搖り訴へるけれど

物も云ひでぬもどかしさに泣きあぐみ

泣きあぐみ現ともなく

指にもつ莖もいつか折り盡し

淋しさは又風のやうに

眠りを呼ぶ。